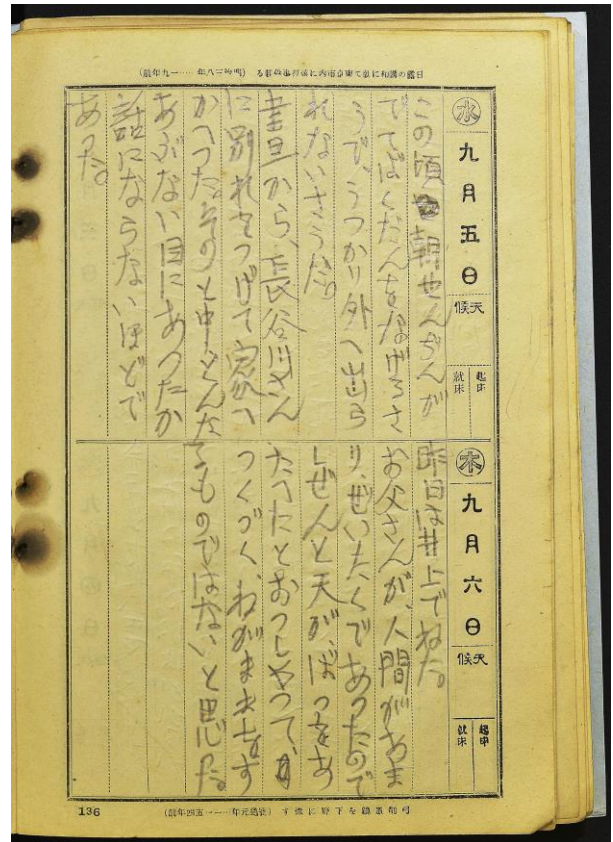


(1) 関東大震災の体験

関東大震災が発生したとき、丸山眞男は小学4年生、9歳であった。この震災と、それに引き続き発生した出来事は丸山にとって、のちの戦争を上回るような強烈な体験となった。しかし若年であったゆえに、それについて自分なりの評価を体系的に行うことはまだ難しかった。たとえば当時、それ以前の墮落した日本に対する天罰として震災を捉える「天譴論(てんけんろん)」が流行し、丸山の父・丸山幹治(まるやまかんじ)も口にしてしたが、丸山はそれを疑うことなく日記に記している。



お父さんが、人間があまり、ぜいたくであつたのでしぜんと天が、ばつをあたへたとおつしやつて、つくづく、わがままをするものではないと思つた。(丸山眞男『小学3-4年生当用日記帳』〈丸山文庫草稿類資料 341-2〉1923年9月6日条：画像)

朝鮮人が爆弾を投げているという「恐ろしいうわさ」についても同様に、日記や作文にそのまま記されている。

この頃朝せんぢんがでてばくだんをなげるさうで、うつかり外へ出られないさうだ。(同前、1923年9月5日条)

丸山は震災の体験を日記やいくつかの作文に記しているが、その中でもっともまとまって

いるのが、手書きの小冊子『恐るべき大震災大火災の思出』である。その奥付には、震災が起きた月である1923年9月「印」、翌10月「二印」、1924年8月「成本」とあり、全12回の本文が書かれた後に5項目の附録が加えられ、震災から1年近くのちに製本された。